

残像の脈々

～vol.2～

3つのシーケンスで構成された「残響の血脈」。

今回はその中のひとつライブ映像について、
制作の流れや僕の思い等を記していきました。

このVol.2では残り2つのシーケンスであります、
インタビュー映像とドキュメンタリー映像について、
臙げな記憶を辿っていきながら、触れていこうと思います。

インタビューとイメージ映像

元々は、このツアーの初日からドキュメントを撮影をしながら、
メンバーと共にツアーバスに同乗して、
最終地ベルリンでたむPと合流する予定でした。

しかし僕が乗るとバスの定員がオーバーになってしまう
という問題が発生したのです。

バスと並走しながら一緒にツアーを回ることも考えたのですが、
現実的に不可能ということで、ベルリンのみの撮影という方向で
プロジェクトは進んで行きました。

ですので、ベルリン以外の撮影はマネージャーの高林さんと藤枝さんに
託さなくてはなりませんでした。

プロ用のカメラを使っていたのはかなりの負担をかけてしまうし、
ましてやお二人はメンバーのケアからプロジェクターからの映像出し、
ドラムのセッティング等も兼任しているので、
とてもじゃないが無理だろうと判断した次第でございます。

そこで登場です。誰でも使えて、
且つ使いたい時にさっと回せる瞬発性の高いカメラ、
そうその名は、、、

iPhone 15 pro !!

昔は、、、

「なんでiPhoneで撮るの？iPhoneで撮るなら
その理由づける企画と内容ではないとダメだ」
なんて頭の硬い人たちによく言われたものです。

しかしようやく時代が追いついてきたのか、
iPhoneもカメラの一機種まで知名度と性能が高まり、
いつしかプロの方にも使われるほどのカメラに昇格したのでした。

お二人にはiPhone15proを持参していただき、
隙がある時に何でも良いので撮ってくださいとお願いしました。

ちょうどその頃、

僕もたむPもiPhone 15 proに変えたばかりだったので、
ベルリンの実景を撮影する時やインタビューの撮影にも使い、
現場ではめちゃくちゃ重宝しました。

撮影機材に関してはまた後ほど説明します。
各メンバーのイメージカットとインタビュー撮影の場所は、
日本での準備期間にGoogleストリートビューを駆使して
当たりだけつけておき、

実際に現地でロケハンをして決めていきました。

僕らがベルリンに着いたのは、
メンバーが乗ったツアーバスが到着する前日でした。
20時間以上のフライトに耐え、ようやく現地に到着するや否や、
一息する間もなくロケハン。

3月だったので天候は日本と同じくらいまだ寒かったのですが、
快晴だったので僕の中の薄暗いベルリンのイメージとは程遠い
太陽の日差しの中、

各メンバーの皆さんのイメージに合った場所を決めていきました。

この日が一番きつかったかもw もうフラフラでした。

この日の夜は、

たむPと共に滞在するホテル(メンバーと同じホテルでした)の
近くのレストランで本場ドイツ料理とビールと

(vol.1に掲載した料理とほぼ一緒)

常連客に勧められたクソ甘いカクテルをいただいて、
明日から始まる撮影への英気を養い、床に着きました。



店の常連客に勧められてノリで頼んでしまったビールベースのカクテル。
クソ甘くて、個人的にはどんな料理にも合わないと感じた。

翌日、到着したメンバーとスタッフをロビーにてお出迎え。

初対面ではないとはいえ、

5人が揃うとDIR EN GREY特有の緊張感を感じるのも、
一瞬その圧に押されそうになりましたが、
メンバーから「何しに来たんですか？」なんて
ジョークを言われたりと、いつもの感じでイジられたので、
一気に緊張はほぐれました。

この日はToshiyaさん→Shinyaさん→Dieさんの順番での撮影です。
これから2時間後にToshiyaさんとロケ地で合流する段取りだったので、

僕とたむPは先にホテルを出て、
タクシーでベルリンの壁があるシュプレー川まで向かいました。

朝から気になってはおりましたが、
この日のベルリンは降ったり止んだりの不規則な雨でした。

しかも川岸なので風も強い。

昨日の快晴だったその場所と本日は
イメージが全く違って見えました。

なのでToshiyaさんが到着するまでの間、
再度その近辺で撮影場所を探すことになりました。

困り果てる僕とたむP、、、

結局は雨を凌ぎながら撮影できる場所を見つけることができず、

皆さんがご覧になってる場所での撮影
(シュプレー川の川岸には変わらず)

となりました。

探してる間、止んでくれるかなと淡い期待をしていたのですが、

結局止んではくれませんでした。

本来であればその対岸(ベルリンの壁がある方)にある

小さな広場で撮影のはずでしたが、

結局は皆さんが映像で見た場所の方が人通りも少なく

撮影はしやすかったですね。

降ったり止んだりする雨の中、

そのままその周辺の路地を歩きながら

インタビューをさせてもらったりで、

結構バタバタして撮影したのを覚えております。

イメージカットの撮影時が一番降ってたかな？

ちょうどシュプレー川を渡る鉄道の高架下が遊歩道になっていたので、

雨を気にせずに撮影はできました。

この場所でインタビューを撮ったら良かったじゃん！

雨も凌げたじゃん！

と思う方もいらっしゃるでしょうが、

ストリートミュージシャンがギターで弾き語り始めてしまい、

音声が命のインタビュー撮影は不可能だったのです。

なので音は関係ないイメージカットのみの撮影となりました。

映像を見ての通り、Toshiyaさんから抜けて見える空は灰色でしたが、

彼から滲み出るミステリアスなイメージと相まって、

彼のイメージに相応しい映像が撮れたのではないのでしょうか。

撮影一発目、天候のトラブルに見舞われたものの無事に終了。

タクシーでホテルへ戻るToshiyaさんを見送った後、

そのまま次の場所へ。今度はShinyaさんの撮影です。

と、その前にvol.1からちょくちょく登場するたむPを
この場をお借りして皆さんにご紹介させていただきます。

映像制作会社の利休Inc.のプロデューサー田村洋(タムラヒロシ) こと、
たむPとはもう7年ほどお付き合いさせていただいております。

初めて一緒にDIR EN GREYの映像を制作したのは、
某衛星放送でのインタビュー特番でした。

その頃はコロナ禍真っ只中でしたね。

その後、東京ガーデンシアターで行われた「疎外」や
某衛星放送でのライブ映像のほとんど、

「25th Anniversary TOUR22 FROM DEPRESSION TO _____」

のBlu-rayとDVD、

最近では配信されました「PSYCONNECT」、

「PHALARIS三部作」 Blu-ray&DVDを、二人三脚で制作してきました。

因みにプロデューサーってどんなことをするの？と
疑問を抱いてる方もいらっしゃると思うので説明致します。

その案件によって様々だと思いますが、

基本的にはそのプロジェクトを形にするには

どうしたら良いのかを考える人です。

監督の選定から予算の管理、

制作周り、監督のアイデアを具現化する、、、etc

一人で色々やる人でもありますし、

最後の最後まで作品と向き合ってくれる人でございます。

今回は監督は僕が務めることは決まっていたので、
それ以外のことを任せっきりだったと記憶しております。
ベルリンではメンバーインタビューの段取りから始まり、
インタビューの映像ではメンバーを捉えるカメラマンとして、
ライブ本番もカメラマンの一人として務めてくれました。
彼の存在がなかったらこの映画はできませんでした。
それくらい大きな存在でございます。



今回で登場2回目の制作会社 利休Inc.プロデューサー田村洋(タムラヒロシ)
別にビールばかり飲んでいる訳ではない

話は戻ります。

僕らはToshiyaさんの撮影を終えて、
そのままタクシーでベルリン大聖堂まで向かいました。

歴史はよくわかりませんが、
人間の手だけで作り上げた建築物だけに、
何か霊的なものを感じました。

日本だと黒部ダムを見た時の感覚に近いと感じました。

それはさておき、これからShinyaさんの撮影です。
僕らが到着した頃は雨も止み、青空が見えておりました。

ただし風は強かったですね。

そこが特に心配でした。

更に、実際にベルリン大聖堂の前に行ってみると、
観光客が多くとても撮影ができる場所ではありませんでした。

昨日はそうでもなかったんだけどなあと思いながらも、
Toshiyaさんの時と同様、ご本人が到着するまでの間、
別の場所を探さなくてはなりませんでした。

天候やら映り込む人や物の問題も多く、
ロケーション撮影は思うようには進まないものですね。

正直、ほんの少しだけ後悔はしましたw
帰国してから、どこかスタジオを借りて、
落ち着いて後日インタビューする案もありましたし。

ですが、一息ついた冷静さがある言葉と、

今回のようにその場で出た言葉では、

リアルの差が圧倒的に違うんですよね。

「残響の血脈」ではメンバーのその瞬間を画と音で切り取り残すこと、
メンバーが「そこにいる」空気感を皆さんに伝えたかったので、
意地でもなんとかしてやるぞ！という気持ちでした。

なので、今までにない、
メンバーの雰囲気や空気感が感じていただけたら嬉しいです。

そうこうしてるうちに、Shinyaさんが到着。
僕らも素敵なロケーションが見つかり、そのまま撮影開始です。
風の問題もShinyaさんが持参してくれた帽子のおかげで、
難なくクリア。

インタビューの映像もイメージ映像も、
天使のようなShinyaさんのイメージにマッチングして、
幻想的な映像になりました。



Shinyaさんのインタビューとイメージ映像を撮影した
ベルリン先史博物館前にある通路

撮影終了後、ホテルまでのタクシーの中で、
Shinyaさんから今回の機材について会話をしました。
流石YouTuberだけあってカメラやマイクの機材には詳しかったです。

僕らも若干ですがプレッシャーを感じましたww
次回は機材関係のお話にも触れようと思っております。

(興味がある方は少なそうですが、、、)

そういえば先日、

Shinya Channelに出演させていただいたのですが、
今回の撮影時のエピソードにも触れておりますので、
見ていない方は見てください。

見応えありますよ。

Shinyaさんと藤枝さんと僕の3人で予告編を見ながら、
Shinyaさんの質問にワンカット毎に
一時停止して解説しているのですが、
進行も構成も編集もお見事でした。
機会があれば、公開が終わってからも
「残響の血脈」関連で何かやりたいですね、Shinyaさん！！

と、まあページ数も限られおまして、
vol.2はこの辺りで終わらせていただきます。
もっと伝えなくてはならないことが沢山あるので、
続きはvol.3に持ち越しとさせていただきます。
次回も楽しみに待っていてください。

vol.3に続く、、、。